

僕が白州に始めて来たのはかれこれ十年以上も前のことになります。小学三年生にキララ夏の学校に参加したのが始まりでした。

三年前からは白州郷牧場のスタッフとキララのスタッフをしてきました。白州で農業と教育をしてきたこの三年間の中でいろんな人に出会いたくさんの事を与えてくださったと思います。人に恵まれていることが自分にとって一番の強みであり自信となりました。

そしてこれからは海外に出て旅をしてみたいと思います、農業と教育の視点から色々な世界を見れたならきっと将来の糧になるのではないかと思います。どんな旅になるのかは行ってみてのお楽しみです、まずはタイに行き、その後カナダに行きます。

いつかは白州に戻り農業をやって生きたいとも思っています。今までありがとうございました。そしてこれからもよろしく願いいたします。



編集後記

先号でお伝えした、きららの学校高校生スタッフ、山田汐里さんの作品が優秀賞として入選した関東地区高校生写真展に行ってきました。山梨県立美術館のギャラリーに展示された百数十点もの高校生たちの作品をひとつひとつみているうちに、わたしにはそれらに通底している言葉が思い浮かびました。

それは「心騒ぐ」感情です。胸はやる期待とざわざわと落ち着かないもどかしさの混じりあう思いです。

いくつかの作品は制御できない自意識にとまどうようであり、目の前にあるものを写しているにもかかわらず眼差しはどこか遠くの一点を見ているようだったり、日常的な光景なのに不安定で激しい何かがフレームの中にじっと潜んでいるように見えます。

高校生たちが切り取った「日本の現在」でもある百数十枚の写真群の前で、わたしは彼らの若さが放つ無意識の微熱にどこか懐かしさを感じたのでした。

さて、白州にもそんな心騒ぎだす季節がまたやってきました。芽吹き春です。 井上 忠彦



本を読んでみよう!

「モモの物語」
エリック＝
エマニュエル・
シュミット
番 由美子 翻訳
メディア
ファクトリー



1960年代初頭。パリのユダヤ人街・ブルー通りで父と2人きりで暮らす11歳の少年モモ。母の顔は知りません。モモが生まれてまもなく出て行ってしまったから。

モモは毎日、学校でも家でも怒られてばかり。「勉強しろ」「掃除洗濯」「食事の支度はどうした」「おつかいに行ってこい」「おつりの小銭が足りないぞ」。弁護士で、帰宅しても薄暗い部屋に閉じこもって本ばかり読んでいた父は、お母さんと出て行った兄のポボルと、なにかと比較をします。「ポボルは学校の勉強をよくやったぞ。ポボルは算数が得意だった。ポボルは風呂場をきれいに使った。便器の周りを小便で汚したこともなかった。まったくポボルとは大違いだ!」。

モモは笑ったことはありません。そんなモモが、食料品を買いに行くのが、イブラヒムおじさんの店。お小遣いほしさにせっせと万引きを重ねます。モモがこの店で万引きするのは、「どうせ、ただのアラブ人の店だから」なのです。

そんなモモを咎めもせず、許し、見守るイブラヒムおじさん。ブルー通りにロケに訪れた大スターブリジッドバルドーに、イブラヒムおじさんが通常2フランのミネラルウォーターを40フランで売りつけたところから、2人は友達になります。イブラヒムおじさんのユーモアと優しさに、しだいに心を開いていくモモ。「幸せの秘訣」を教わります。いっばう、イブラヒムおじさんも、モモと過ごす時間をつうじて、これまでの孤独な生活が変わっていきます。この物語はそんな2人の物語です。

幸せの秘訣ってなんでしょう?そして、イスラム、ユダヤ、ちがう宗教と習慣をもつ2人を、偏見や先入観を超えて、深い絆で結んだものは?

世界のニュースは希望を伝えないって決めたように、暗いニュースばかり難解に報道するけれど、そんなに難しいことではないってことが、2人の会話にはたくさんちりばめられています。

ちなみのこの本は、「イブラヒムおじさんとコーランの花たち」という題名で映画化されています。こちらもとってもオススメです。 高草木 里香

きらら新聞 34



「書を読み、自然に親しみ、勤労にいそしむ」

2007年
4月15日

発行 キララ新聞社
発行責任者 秋山 眞兄
山梨県北州市白州町横手 2259
白州郷牧場内
TEL:0551-35-0131・4520
FAX:0551-35-0132

古代ギリシャ精神の「論証」から想うこと

近代社会の形成の基盤には、西欧文化の基層である合理的・理性的・科学的・民主的な考えが横たわっているといつてよいであろう。その源流はよくいわれるようにヘレニズム（古代ギリシャ精神）とヘブライズム（ユダヤ教・キリスト教精神）である。環境破壊、戦争多発、格差拡大、思想・倫理の退廃など、今日の事態を思えば、西欧文化の問題性が赤裸々に露呈していると言える。自然との調和、足るを知る生き方など、東洋の伝統的思想・倫理が見直され始めていることもうなずける。そうではあるが、西欧文化の源流であるヘレニズム、ヘブライズムの精神に学ぶことは今なお必要であろう。特に、数学教師の私にひきつけて言うならば、今日の数学の基盤の「論証」は古代ギリシャで誕生した。また「学問」がソクラテス、プラトン、プラトンが創立したアテネのアカデメイア（その校門には「幾何学を知らざるものは入るべからず」と掲げられていた）で育ったアリストテレスなどの賢人たち、その後のアルキメデスをはじめとするアレクサンドリアの賢人たちによって確立したことを、我々は忘れるわけにはいかない。「学（スコラ）」の語源はギリシャ語の「閑（スコレー）」であるが、「小人閑居して不善をなす」のではなく、奴隷制の恩恵の上であるとはいえ、彼らの「賢人閑居して学をなす」精神をどこかに持ち続けたいと思うのである。

ところで「論証数学」の祖は、紀元前580年頃に活躍したタレスだといわれている。彼は「万物の源は水である」と主張した。彼の後で活躍し数学を一層発展させたピタゴラスの「万物は

数なり」という主張と比べれば、今ではタレスの方が真理を見抜いていたともいえる。タレスは「半円の円周角は直角」「対頂角は等しい」「三角形の2角夾辺が等しければ合同」などを証明し、「ピタゴラスの定理」と呼ばれる「直角三角形の斜辺上の正方形は、他の2辺上の正方形の和に等しい」の証明をしたであろうし、また、円の面積の計算法を研究したに違いない。重要なことは、タレスが独創でこのような命題を考え、論証したわけではないということだ。タレスやピタゴラスが論証を行わざるを得なくなったのは、古代メソポタミアや古代エジプトで数学的な様々な発達があり、しかも、例えば円の面積計算法には違いがあり、なぜ違うのか、どちらが正しいのかを考え始めたところから出発したことは間違いない。つまり、異なる文化を知り、またその地を旅し、考えたことが「論証」が誕生した原点なのである。

多様な生き方、考え方、そして多様な問答をすることが可能であったからこそ「学」が生まれ、哲学が始まり、市民的自由を獲得していったといえる。しかし、昨今の日本の政治やマスコミ、そして教育環境（教育行政、学校、家庭）が、それらを根こそぎ枯らしていくのではないかと、この危惧を、私は強く感じる。だからこそ、子どもたちが多様な人と出会い、多様な暮らしと出会い、そして考えていくことが、一層重要になってきているといわなくてはなるまい。その土壌を創り出すことは、今や一般社会や行政には望むべくもない。心ある者が紡ぎだしていくしかない。 秋山 眞兄





2007 きらら

春の学校

土に暖かさが戻ってきたことを感じると、自分たちの身体もふんわりとほぐれていく。春の学校は穏やかだ。てんとう虫取り、野草採り、餅つき、森の散策、富士山麓での地球についての学習、そして夜には編み物をしたり、中国の子どもたちのことを知ったり、音楽を楽しみ踊る。そして、大切な朝夕の作務や農作業。

ゆったり流れる時間と初参加の子どもたちの微笑みが、スタッフの心持ちを和ませる。

春の学校の日程

3月30日:

開校式①、てんとう虫採集②(畦で200~250匹採集して、ハウスに放つ) 編み物講習③

3月31日:

富士山ビジターハウス・風穴④・三湖台でフィールド学習⑤、音楽を楽しもう⑥

4月1日:

野草採り⑦、椎茸植菌⑧、餅つき⑨、シアター「不都合な真実」

4月2日:

レタス定植・ジャガイモ種まき⑩、冒険的散歩⑪
シアター「中国・阿苦村の子どもたち」⑫

4月3日:

作文⑬、掃除、閉校式⑭ ※作務は毎日⑮

